

原爆十周年を迎えて

古屋野宏平

昭和二〇年（一九四五）八月九日、世紀の驚異である原子爆弾が攻撃兵器として、地球上に於ける第二発目の炸裂をわが長崎の上空でしてから、早くも十年の歳月が流れました。この間に我国は漸く独立と秩序とを取戻し、世界の緊張もまた平和に向つて緩みそめ、原子爆弾について語りよい時勢となりました。もしこの機を逸すると、いわゆる「十年一昔」で私共の記憶は色あせて辿りにくくなり、感激も昔日のものとなし去るでありましょう。よつて私共相計り、当時の関係方面の追憶を、主として遭難生残者の諸君に記していただき、之れを素として記念誌を編むことを企てました。

けだし、一つには尊き犠牲者たる亡き同僚師友への手向けとし、二つには我が長崎大学前史の参考資料に供え、更に又御遺族同窓知友の追憶のよすがにもと念願してのこととあります。

一度この企が医学部、薬学部、風土病研究所等関係部局の職員及び遺族会にはかられますと、各自このために資財を提供され、加うるに委員の方々は少なからぬお骨折りをされました。それで斯く美事な完成を見ましたことは、まことに感謝感激のほかありません。八五〇有餘の御霊も大学復興の現状と共にこれを嘉納されることと信じます。

おもえば八月九日、爽かに晴れた朝、先づ警戒警報が出、次で七時すぎ空襲警報となり、九時には之れが解除のサイレンが鳴り渡つたので、人々は常態に復つて講義に、診療に、それぞれの部署について居た。十一時二分、突如怪光一閃つゞく轟音と共に——「ピカドン」と言う表現は端的である——長崎市の北西部は潰滅に帰した。爆心から六〇〇〜八〇〇米の圈内にあつた長崎医科大学、附属医院、薬学専門部、風土病研究所、看護婦寄宿舎等一連の建物は、八五〇有餘名の職員、学

生生徒と共にこの例外であり得なかつた。

本来なら八月は夏期休暇中であるが、当時は非常短期速成で休暇を返上して授業が続けられ、加うるに一九四〇年頃から、いわゆる東亜共栄圏への医師の供給に備えて、臨時附属医学専門部（主事高木純五郎教授）まで置かれたので、犠牲学徒の数は倍増したわけである。

大学の管理部と基礎医学の教室は薬学部と共に、附属医院よりも爆心にやゝ接近した丘上に、木造で建てられていた。看護婦宿舎は附属医院の構内であつたが、木造二階建であつた。之等木造建築は爆発と同時に倒潰し、次で原子の驚く可き高度の熱エネルギー放射によつて燃え出したので、管理部の如きも、山木事務官ほか給仕さんまで、一切の書類帳簿と共に灰となつた。（ちなみに山木君は大金庫の前に席があつたので、一時圧死をまぬがれたらしく、救いを求むる声を国房教授は聞かれたとか。）

基礎科の内藤達男教授（細菌）は教室の廊下で、大倉玄一教授（衛生）は教授室で、清原寛一教授（生理）は教室内で圧死されたことがお遺骨に添つた遺品により確かめられた。わけでも池田、清原、永井、金子（直）の四教授、中村（定八）助教授の如きは御家族まで全滅された。

当時基礎科の五つの講堂では講義中であつたから、小野直治教授（医專解剖）、芦塚陽助教授（生理）、梅田薫教授（病理）、齋藤圭一教授（医專生化学）、福田秀信教授（医專衛生）等は教壇に、これを前に学生のお遺骨が、整然とその座席にならんで発見された。第一次大戦の際、独軍の爆弾によりベルダンのざん壕に、銃尖のみを現わして整列埋死した仏軍の話は聞くが、大学の講堂で平和の学徒が、斯かる死をとげたことを私は知らない。

薬学専門部では当時幸にも一、二学年生は熊本県の水俣、山口県の小野田、その他の工場に勤勞奉仕で出て居り、三年生は学内で防空壕を掘つていたので、多くは壕中にいた、め犠牲が少かつた。たゞ杉浦孝教授（衛生化学）が薬草園で爆死

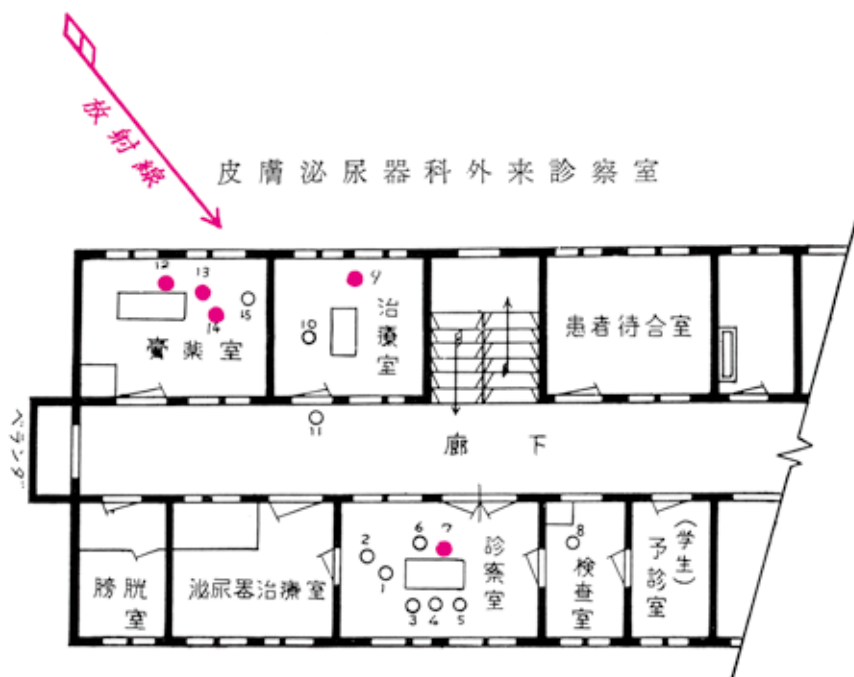
された。

東亜風土病研究所は一九四二年併設され、角尾所長ほか所員の発令もあり、建築費は民間寄附の二十餘万円も調つて、窮乏の最中に漸くのことゝで資材万端が集つていたが、起工寸前という所で一切烏有に帰した。

臨床科教室（附属医院）は基礎科教室と一〇〇米余の谷をへだてて、やや低い丘に鉄筋コンクリートの三階建が、南向きにて並行していた。各室は中廊下を挟んで南北両側にならんでおり、爆心は北西にあつた。従つて北側の部屋に居た者は放射線に直面することゝなり、南側の者に比し死者を多く出したが、（附図参照）木造のように倒潰による圧死はなく、僅かに内藤勝利教授（産婦人科）の如く書架の下敷となられたり、山根浩教授（眼科）の如く落下物により重傷を負われた例はある。当日登院して助つた北村包彦教授（皮膚科泌尿器科）、調来助教授（外科）、長谷川高敏教授（耳鼻咽喉科）古屋野宏平教授（外科）永井隆助教授（理療科）等は皆南側にいた者である。放射線による傷害で斃られた角尾晋学長（内科）石崎成助教授（外科）大和田野浩一講師（外科）などの部屋は北側で爆心に向つて窓が開いていた。

基礎科の教授中にも逃れ出て一時助かつた方はあるが、高木純五郎教授は、收容された横穴防空壕内で枕をならべて居た角尾教授も診察したわれ／＼にも、全く見当がつかず、診断不明のまま、たゞ水を飲んで吐き飲んでは吐きしながら、十日悶死された。お遺骸はテニスコートに土葬した。国房二三教授（法医）は御自宅で十五日に、祖父江勘文教授（薬理）は佐野保教授のお宅に運ばれて、自ら気管切開を試みんとする程の強い口狭炎性呼吸困難を起して十六日に、亡なられた。臨床科の山根浩教授は破傷風を發して十五日に、角尾晋学長は自ら赤痢を疑われた程の血便下痢に、四十度を越える稽留高熱が加わり二十二日遂に逝かれた。病院の構内に皆で木材をつみ火葬を営んだ。

爆災から復興の當時を回顧すれば、涙と共に思出は次ぎ次ぎと湧いて止まない。



三 階

1. 北村教授	受傷	
2. 西森学生	受傷	
3. 黒木副手補	無傷	
4. 東岡先生	受傷	
5. 金子講師	受傷	
6. 後田看護婦	脱毛	
7. 橋本看護婦	脱毛発熱	八月二十六日死亡
8. 土橋看護婦	受傷	
9. 中山助手	受傷	八月末死亡
10. 山崎看護婦	受傷	
11. 浜崎看護婦	受傷	
12. 肱黒看護婦	火傷	八月十日死亡
13. 若松看護婦	受傷発熱	九月一日死亡
14. 林看護婦	受傷発熱	九月六日死亡
15. 福島看護婦	火傷	